



2012年4月11日放送

漢方頻用処方解説 補中益気湯①

日本大学 統合和漢医薬学分野 矢久保 修嗣

補中益気湯は、李東垣（りとうえん：1180-1251）の著した『内外傷辯惑論』、『脾胃論』に記載されている処方です。腹部（漢方では中焦という）、その中焦に存在する脾胃といわれる消化器系の機能を補い、気力を益す働きがあるという意味で、補中益気湯と名づけられたものです。これには別名があり、気力の不足を補う代表的な薬であることから、医王湯の別名があります。これを発案した李東垣は、中国の時代では、金や元という時代の人です。日本の歴史では、鎌倉時代の初期のころです。

李東垣が補中益気湯を創方したのには、以下の2つの契機がありました。第1は、蒙古軍に包囲された体験です。そこでは感染症である外感病と、心身の疲労によって消化器系が傷害を受けて発症する内傷病を医師が区別できず、日々、人々が病死しました。彼は、ここで内傷病の重要性を認識しました。

第2は、彼自身、そもそも内傷病になりやすい体質だったらしい点です。彼が酒に弱い体質であったことから、飲酒により胃腸障害が起こる機序を論じています。そのため、補中益気湯などの内傷病の治療方剤を開発したことが示されています。

この補中益気湯の趣旨は、人は飲食物に含まれているエネルギーで生きている、消化器系のはたらきが人の活動の基本であるという概念です。飲食物が身体に入ると、それから消化吸収され、そのエネルギーは全身を循環して健康を維持しています。しかし、飲食の節度を失うと消化器系が傷害を受け、いろいろな病を発症するようになります。これが内傷病です。これは風寒の邪、風や冷えの邪気を外に受けたときの症状とよく似ています。消化器系の傷害を原因とするものは、風寒の邪のような外からの要因を原因とするものと

は、発症の機転や治療法も異なるので、判別をしないと治療法を誤ってしまいます。内傷病は味の甘く、かつ温める作用のある薬で脾胃の気を補って気を昇らせ、甘く、かつ生体の熱を瀉すと治ると考え、李東垣は補中益気湯を生み出しました。

彼の医書は 1276 年の初版から日本に伝来していた可能性も推測されています。わが国における本方剤への確実な言及は、曲直瀬道三の著述にみられます。曲直瀬道三は『衆方規矩』において、「補中益気湯は中焦にある脾胃の気、即ち消化機能の低下によって飲食が進まなかったり、もともと胃腸が虚弱で発熱、頭痛、四肢の倦怠感、心が落ち着かず、肌が日々痩せ衰え、次第に衰弱するものを治療する。この薬はよく気を益し、虚証にみられる発熱をしりぞけ、脾胃を補い、気力と体力を生ずる。」（意識）と記載しています。

1600 年代の長沢道寿の『増広医方口訣集』によると、

- 1) 補中益気湯は、心身の過労などの内傷といわれる要因によって、気の衰えるものを治療する。
- 2) 頭痛、悪寒、発熱、寒熱往来、身体の疼痛があり、口乾が甚だしいなど、外感病のような症状を呈するが、内傷や気の不足によると推察されるものには補中益気湯を用いる。
- 3) 生来虚弱の人が風寒に感じて病むとき、内傷と外感をくらべ、内傷の方が重い場合は補中益気湯を用いる。外感が重い場合はまず外感の薬を用いた後、補中益気湯で治療を行う。
- 4) 生来丈夫な人でも、発汗剤、吐剤、下剤を用いる治療を行っても治りきらないものは、まだ正常な機能が低下しているため、補中益気湯を用いる。
- 5) 下痢症、咳嗽などで気が衰えているものには、みな補中益気湯を与える。
- 6) 手足が萎え弱った状態や、手足がひきつれ痛む状態、あるいは半身不随、身体に虫がはうような感じがするものなどの多くは、脾胃の虚に属する。脈証をたしかめて補中益気湯を用いる。

と記載（意識）しています。

浅田宗伯は、『勿誤薬室方函』ならびに『勿誤薬室方函口訣』において、「補中益気湯は脾胃の損傷を治療する。この処方はもともと李東垣が建中湯、十全大補湯、人参養栄湯などから、薬味を差し引きして組み立てたものなので、いろいろの口訣がある。つまるところ、小柴胡湯証のさらに虚証を帯びるものに用いるのである。補中とか、益気とか、升提だのということにこだわる必要はない。少陽病の小柴胡湯の証で、内傷を兼ねるものに与えれば間違いない。したがって、男女ともに虚勞、雜病にかかわらず、この処方を長服して効を得ることがある。婦人にはとくに効果がある。」（意識）と記載しています。

構成生薬は、ツムラの補中益気湯エキス剤（TJ-41）では、人参、蒼朮、黄耆、当帰、陳皮、大棗、柴胡、甘草、生姜、升麻の 10 種類の組み合わせよりできています。この中で、重要な役割を果たしているのが人参と黄耆、柴胡と升麻です。

人参は健胃、強壯強精剤です。胃腸の衰弱による新陳代謝機能の減退を改善し、胸のつかえ、食欲不振、倦怠、腹痛、下痢の治療に用いられています。また黄耆は異常な発汗を

抑制し、利尿することで体表の水毒を改善します。強壯剤としての働きもあるので、虚弱者、栄養不良の治療に用いられています。

この人參と黄耆を同時に含む一群の処方を見れば、參耆湯は臨床的には、消化吸収機能賦活と全身の栄養状態改善を通じ、生体防御機能を回復させて、治癒促進をはかる作用のある薬剤です。

柴胡と升麻は解熱の効果があるといわれており、また気を上昇させる作用も推測されています。これらの総合的な作用によって、消化器系の働きを助けて体力を増強させるというものです。

補中益気湯を使用する目標を考えると、少量の柴胡を含む点では、一種の柴胡剤ともいえます。江戸時代の和田東郭は、「補中益気湯のそもそもの狙いは、心下の両脇にみられる痛みと痞鞭を標的として組み立てたものである。是れ、小柴胡湯の変方なり。」(意識)と記載しています。浅田宗伯もまた「小柴胡湯の虚候を帯ぶる者に用うべしとする。」と記載しています。

補中益気湯の使用目標は、江戸時代の津田玄仙による口訣がよく知られています。

第1に、手足が倦怠する。津田玄仙は手足倦怠という証は、「内傷病全体にかかる目標であることを知るべきである。他の証は病の軽重により、有ることも無いこともあり一定しないが、この倦怠の証だけは内傷労役には必ずある証で、ただこの証をよくよく見定め、聞き定めて、間違いなければ補中益気湯の主治であると判断すべし。」(意識)といっております。

第2に、言語が軽微である。言葉を発する際に、その力がないことです。

第3に、眼勢が無力である。津田玄仙は内傷病については、「すべてよく眼中を診察すべし。補中益気湯が的中する証は、必ず眼の力が弱いもので、病人がどれほど力を入れて見張っても、全体の眼精がなんとなく弱く見えるものである。」(意識)と述べています。

第4に、口中に白沫が生ずる。

第5に、食味を失う。食物の味がしないことです。砂を嚙んでいるようだと言及することもあります。

第6に、熱い飲食物を好む。津田玄仙は、「太陽病表証の時は、どんなに発熱しても咽の乾くことはない。熱が裏におちいると口渇を生じ、必ず冷水を好む。熱湯は嫌がるものである。もし発熱があつて熱湯を好むならば、これは必ず内傷をかねた傷寒と知って治療すべきである。口渇に関しては、内傷の口渇は病みはじめから渴するもので、10人のうち7～8人は熱湯を好む。」(意識)と記載しています。

これに付随して舌の所見に関して、「内傷の熱証では、まず多くの場合、舌苔は生じない。体内から蒸すような著しい熱では白苔がかり、さらに著しいときは黒苔が現れることもある。しかし、舌の潤いも乾かず、芒刺というとげの生えたような舌苔も生じない。」(意識)と述べています。

第7に、臍傍に動悸がある。臍の周囲で腹部大動脈の拍動を触れることです。

第8に、脈が散大で無力である。津田玄仙は、「補中益気湯を用いる時の脈は大きくて力

がない。下痢のあとの虚証には、ここにいう大脈をうつものが多い。この大脈とは脈が大きいのにしまりなく、真綿をふくらませたような感じで指にあたる。初心のうちはこの大きさに目をつけて実大などと心得て、薬の盛り違いをするので、気をつけなければならない。外邪に罹ったときの脈は浮緊で力があり、内傷病の場合は脈が大きいがないというのが、一応の大原則である。」(意識)。

この8つの症候のうち、「1つから2つの症候があれば、この処方の使用目標としてこれを用いる。」と、以上のようにまとめています。

今日は、補中益気湯の成立にかかわる概念、これを創成した李東垣、日本の古典における記載、そこにみられる補中益気湯の使用目標を紹介しました。次回は、現代における補中益気湯の使用目標、症例、その応用などをご紹介します。